

# ら訪 探 歴史 クラブ 其の63

TAHARA History Inquiry Club

潮騒の伊良湖岬

渥美半島は、豊橋の南部をその基部として、東西に約40kmほど伸びた半島です。地理的に見ますと、この東西に伸びた半島といつのは、全国でも非常に珍しいということですね。田原市は、そんな渥美半島の大部分を占め、南は太平洋、西は伊勢湾、北は三河湾と三方を海に囲まれています。そして半島最先端にある伊良湖岬は、古来よりの景勝地として有名で、多くの文人墨客たちが海を渡り、この地を訪れました。

現在の主流は陸上交通ですが、少し前までは、船による海上交通が盛

んに行われていました。そんなころ、伊良湖水道（伊良湖渡合）と呼ばれる伊良湖岬と神島の間は、「航海の難所」として知られていました。速い潮の流れと、沖合いにまで続く岩礁により、多くの船が難破していたからです。先月号でも紹介しましたが、日本民俗学の父と称される柳田國男は、その著書『遊海島記』のなかで、

「況してや此の海峡の潮の速さは、馴れたる水手も息吐くべき処なり、阿波の鳴門か、銚子の口か、伊良湖渡合か、恐ろしや渡合の広さは一里にも足らず。げにや伊勢の海の入江々々の満潮引潮を集めて、流し下し差し上す勢は、比ぶるに物も無く、潮騒の須臾の間ならでは、水の淀む



多くの船が行き交う「伊良湖水道」

といふこと無し。殊に風ある日は、ひかた、ならひの隔つる山無きは更なり。其他何方より吹き来るも、多くは神島に吹き当て、忽にしまきとなり、帆を劈ぎ船を翻す勢は、偏に鬼神の業の如し。」

と記しています。このように、伊良湖渡合（伊良湖水道）は、鳴門（徳島県）、銚子（千葉県）とともに、潮流が速い海の難所であるとして、歌にも詠われたほどでした。

現在の伊良湖水道は、東側の朝日礁、西側の丸山出シ、コズカミ礁にはさまれた幅約1200m、長さ約3900mの非常に狭い航路ですが、貨物船や漁船など、多種多様な船舶が日々行き交い、中部経済圏を支える伊勢湾・三河湾内各港への、唯一の玄関口となっています。

さて、この海上の安全を守るため、昭和4年（1929年）11月20日から点灯し続けているのは、伊良湖岬観光のシンボル、伊良湖岬灯台です。1万7000カンデラの光を沖合い約23kmまで届けているこの灯台は、対面する神島灯台とともに、伊良湖水道の安全を今も見守っています。

この伊良湖岬灯台の建設には、こんなエピソードがあります。太平洋戦争が終結するまで、伊良



波打ち際に建つ「伊良湖岬灯台」

湖岬から西ノ浜にかけては、旧日本陸軍の大砲の試験場がありました。そのため、この付近一帯は陸軍用地として接収されていたのですが、灯台は、そこへ建設されることになりました。当初の建設予定地は、岬先端に小高くそびえる古山の上でした。しかし、砲弾を避けなければならぬという理由から、その建設地は波打ち際へと移されたのです。

この伊良湖岬灯台のように、波打ち際に建つ灯台は全国でも珍しく、平成10年には、思い出に残る灯台として、「日本の灯台50選」に選ばれています。

現在、この灯台周辺は遊歩道が整備されています。伊良湖水道や灯台を望みながら散策してみたいかがでしょうか。（天野）

田原市博物館 22局1720